

DV被害者の悲しみ、痛み、苦しみに、より添う心を

幼い主人公が、幼いことばで語るこのものがたり・・子どもの心の叫びが、聞こえてきます。



[2000]

パパと怒り鬼
一話してごらん、だれかにー

2011年 ひさかたチャイルド

グロー・ダーレ (著)
スヴァイン・ニーフス (絵)
大島 かおり・青木 順子 (訳)

ひとりでくるしまないで
みんな
ここにいろよ

ぼくは、ボーイ。パパとママの3人で暮らしている。でも、ぼくとママはいつもパパのきげんを気にしている。ある日のこと、パパのようすがおかしい…。と、小さなボーイが語り始めます。怒り鬼にとりつかれたパパの、すさまじい暴力のようすを。

普段は優しく大きいパパ。今は落ち着いているかな？だいじょうぶ、落ち着いているぞ。でもパパは不機嫌で何も言わない。怒り鬼がじわりとパパことりついてくる気配がする。「ぼく、何か悪いことをしたのかな、もっといい子になるから、こないで、怒り鬼！」。ボーイの心の声の叫びは届かず、怒り鬼にとりつかれたパパが恐ろしい顔で迫ってきます。ボーイの心は恐怖で張り裂けそう。その時、ママがボーイを子ども部屋に押し込んで、怒り鬼の前に立ちほだかりました。壁のように大きくなって…。

怒り鬼は、ぼーう、ぼーうと燃えさかる赤い炎を出してママにおそいかかる、炎のなかのママの泣き声、風のなかの叫び声、何もかもがこわれていく。火を消してパパ、怒り鬼を消して。けれど誰にも火は消せない。

なにもかもが壊れてむき出しになる、うすっぺらい紙のような家。壁越しに聞こえる凄まじい暴力に心を閉ざしてしまうボーイ。時が過ぎ、怒り鬼が抜け出した後のパパが立っています。その手に包帯を巻くママ。ママはこのことは家族だけの秘密と言いました。ボーイの唇には鍵がかかってしまいました。傷ついた幼い心は、いつしか、白い大きな犬と遊ぶ空想へと逃避していきます。そして、現実、垣根のそばで座って待っていてくれた白い大きな犬。柔らかい耳をなでて、ボーイの心は解けていきました…。

犬がじっと耳をすまして聞いてくれるから、ぼくは犬になにもかもを打ち明ける。小鳥たちにも、ぼくがいつも登るあの大きな木にも。みんなが言います。「だれかに話さなくちゃいけないよ」「話すんだよ」「話しなよ」。でも、「できないんだ」。

「じゃあ手紙を書きなよ」「手紙だ、手紙だ！」とみんなに勧められて、ボーイは王様に手紙を書きました。

「しんあいなおうさま、パパはなぐります。ぼくのせいでしょうか」。ある日、王様が家にやってきました。手紙が届いたのです。

パパは王様といっしょにお城で暮らすことになりました。そこで、過去に出てきたいろいろな怒り鬼と向き合っ、そいつと闘って、壊れた自分を修復するのです。何もかもがうまくいく日は、きっときます。おひさまが輝き、みんなが笑い合える日も。今、ボーイはやさしいパパと会える日を待ち望んでいます。ようやく、希望に向かう最初の一步が踏み出せたのです…。(みっと)

巻末に、この物語の生まれた国、ノルウェーと、日本の、「DV加害者の更生取り組み」が紹介されています。

★子どもたちは、誰かに話す権利がある★

ノルウェーにおけるDVと加害者の対策状況

オイヴィン・アシュム(Oivind・Aschjem)

1949年生まれ 1981年からDV問題に取り組む。精神看護師、家族セラピスト、作家としてDV問題幅広い視点から取り組んでいる。
本書パパと怒り鬼原書のアドバイザー

★加害者が変わることが、最大の被害者支援助となる★

日本におけるDVの現状と課題

信田 さよこ(のぶた・さよこ)

1946年生まれ DV、児童虐待、アルコール依存症、摂食障害、ひきこもり等に関する人々のカウンセリングと取り組む。「加害者は変えられるかーDVと虐待をみつめながら」他、著書多数